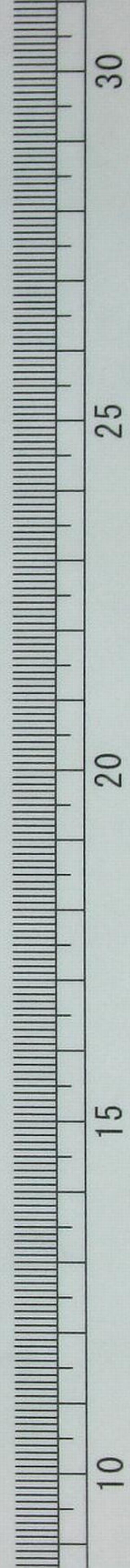


開化  
彌次  
喜長  
多

初編  
上

欣





開化

初編 上

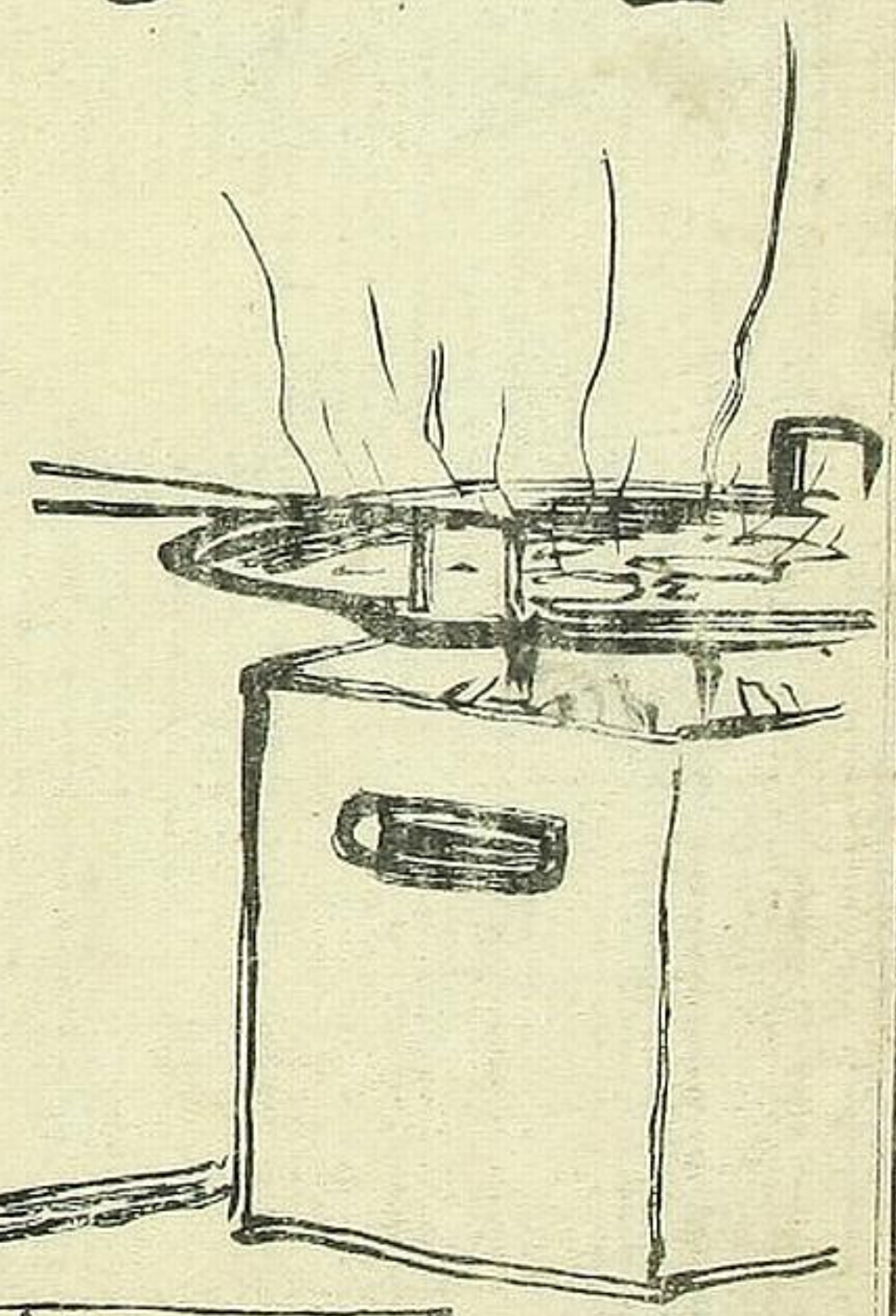
彌次

喜多

松奔 蚊若 お形と板

葛菴 画

ちよ 好酒 巖と巻



葛菴 画

開化彌次喜多初編序

凡そ人表ふ觀樂の形と極々と輕く裏

ふ及てふ花の萱を帯くめき心配者え

ら孝ふふ困難其状と示すと雜も狗と

及てを園ふ安みする如美と家と出若めら

り産母の四斗樽と見と眼を細くする

あり棚の上乃牡丹餅と見て涎は流る

開化彌次喜多初編序









孝介



三



三





五五  
五五  
五五

おのり  
さうさ  
さうさ  
さうさ

開化弥次喜多初編上

東京麻布

松茸主人戯著

題額

酒喜唱句

癡呈子曰大概の浮世の風潮も文明開化も  
 登りたき智恵の開けし今日の日も仍ほ馬鹿  
 らした以ふへの戯氣職なる棟梁が今又  
 爰ふ出掛るは一寸と湯屋まで軽氣球又々  
 豆米利加佛蘭西小籠と昇せや行くやうな  
 手術知らむの禪持等が傍若無人の舉動乃



はの翦れ玉が今回と旅ふらねは目前實  
ふ見るやうふ面白く見甲斐も開化の弥次  
喜多と偽名の罪も重けをどそも影法師手  
ふ立ぬ虚と實の手合ひゆへ看客ふおこな  
答めたまふぞ

弥次郎兵衛喜多八乃大憤發

頃々明治十のまり九歳と々四の海浪も静ふ吹  
風も枝を鳴らさで降雨も塊さへも傷らずふ民  
の豊けき形勢い巷ふ腹を鼓ら謡ふ心を君が世  
は千代ふ八乃代と祝ひつゝ萬の業も弥増ふ今

い開けて外國と鋭心競ふ朝和風ふ色と争ふ紅  
葉の耀き渡る初冬ふ處々旭日さし登る鳥が鳴  
くてふ東ふる都の中乃麻布あて最も寒き  
葉葺の奥に坐敷ふ二人して懇々話を男子何と  
是なん注ふし昔彼の十返舎一九の手ふ生と東  
海道や木曾路うて其名と揚一枋面屋弥次郎兵  
衛尻切観音の地尻ふる喜多八なりとい知られ  
たり抑も此二人の男子等が何いふ事を密談不  
と聞けば二人も文明の風ふ吹れて智識も加し  
萬の事は知れし故昔し為したる百千の事が口



惜く思われて這回社も身小塗りし泥淨と洗が  
ん心以て洗ぐとすれど墨田川流きの末々此度  
も搔濁されて海原の廣き浮世ふ名を流しける  
彌次さん 何んだへ 素「ホンニ昔の事と思  
やア種々様々の悪洒落でへふ笑もき言いられ  
實ふ何も苛うつたねへ今と成つて考げへて見  
ると腸うら沸騰つて来る様だふ 素「エー一穢ね  
へふアお前へそして鼻うらと口から糞が出て  
来るのうへ 素「ナアニ左様ドやねへふ矢張り昔日  
の様ふ考げへて馬鹿を饒舌つちやア早魃の雨

とねんふし些とも下さうねへコウ彌次さん貴兄  
も昔の事と枕と割つて能く考げへて見なせへ  
彌次 考げへるとも考げへるとも 素「寝たときやア  
何時も覺へもいねへ様ふ枕と外して居らアを  
して又間ふら夜半でも燈火と明して煙草と喫  
んで輪ふして見て居らアねへ 素「最ふ斯う開け  
て来た今の世ふ其様熱に冒うさまで居ちやア  
正實ふ困るせ 盟兄も是まで 高賣往来や庭訓な  
んで大變な學問もむれア茶や花其外何や角や  
隨分勉強為たドやねへり又斯う遣つて家ふ蟄



居て居たつて新聞上で大概外事内情のこたア  
明るく成切つたぢやねくう最うこつちやア頂  
天ときて貴兄々七八分目だるうと思つてるの  
ふまゝ矢張り青ほいねへ併し江湖の人から見  
た日あやア其れでも能いだるうねへ全躰へ此  
方が餘程人なみと越してゐるから後左様々々波  
を越したこたアおらもねんあじモア百万や二  
百万ぢやアきかねへや何でも三千六七百万は  
疾ふふ越してゐるだらうよソコデ以ておらア二  
人が種類飛切ふ好いと謂ふ評判で近所合躰か

まで喜んでおらたち顔さへ出せむ皆が笑つ  
て呉きらアね貴兄々何だろ知らねへがおい  
えはモウ頃日ぢや心の所が伶俐發明ふなつた  
から何様な事ふ出會したつて平氣だア万ふ一  
も不の字い言もねへや「おらだつて正直ふ注  
く日よやア何様ふ人あも劣やア一ねくホニニ  
立派なもんぢや然しておらア勝が丈夫で精神  
が能いと公衆が云ふぜそれア知れて居らね  
之むらのを虚ぢやねへが食物改良の魁ぢやホ  
ら勝が肥て精分も強へ訳だよ今あら一晚ふ五



月夜... 不...

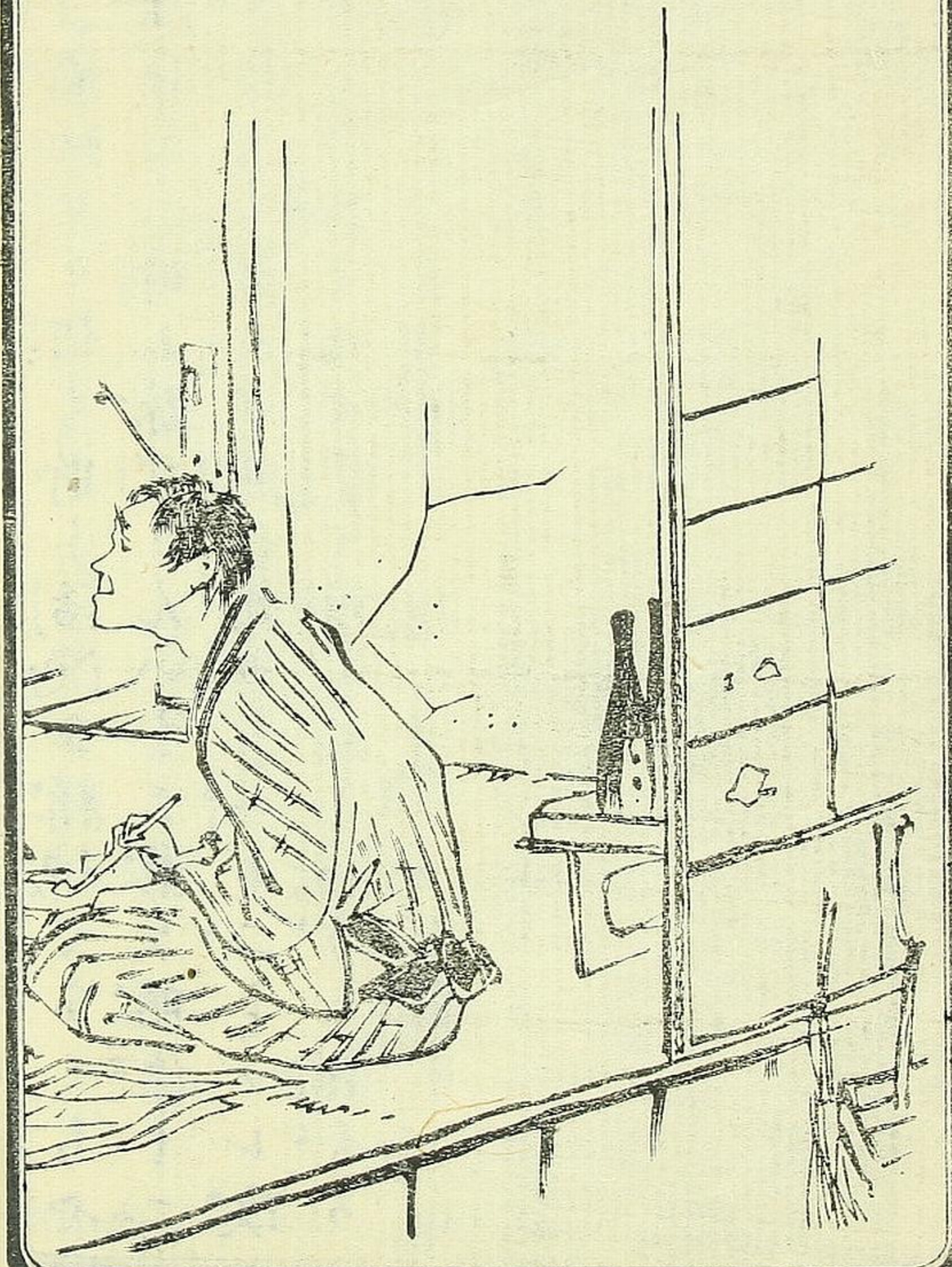
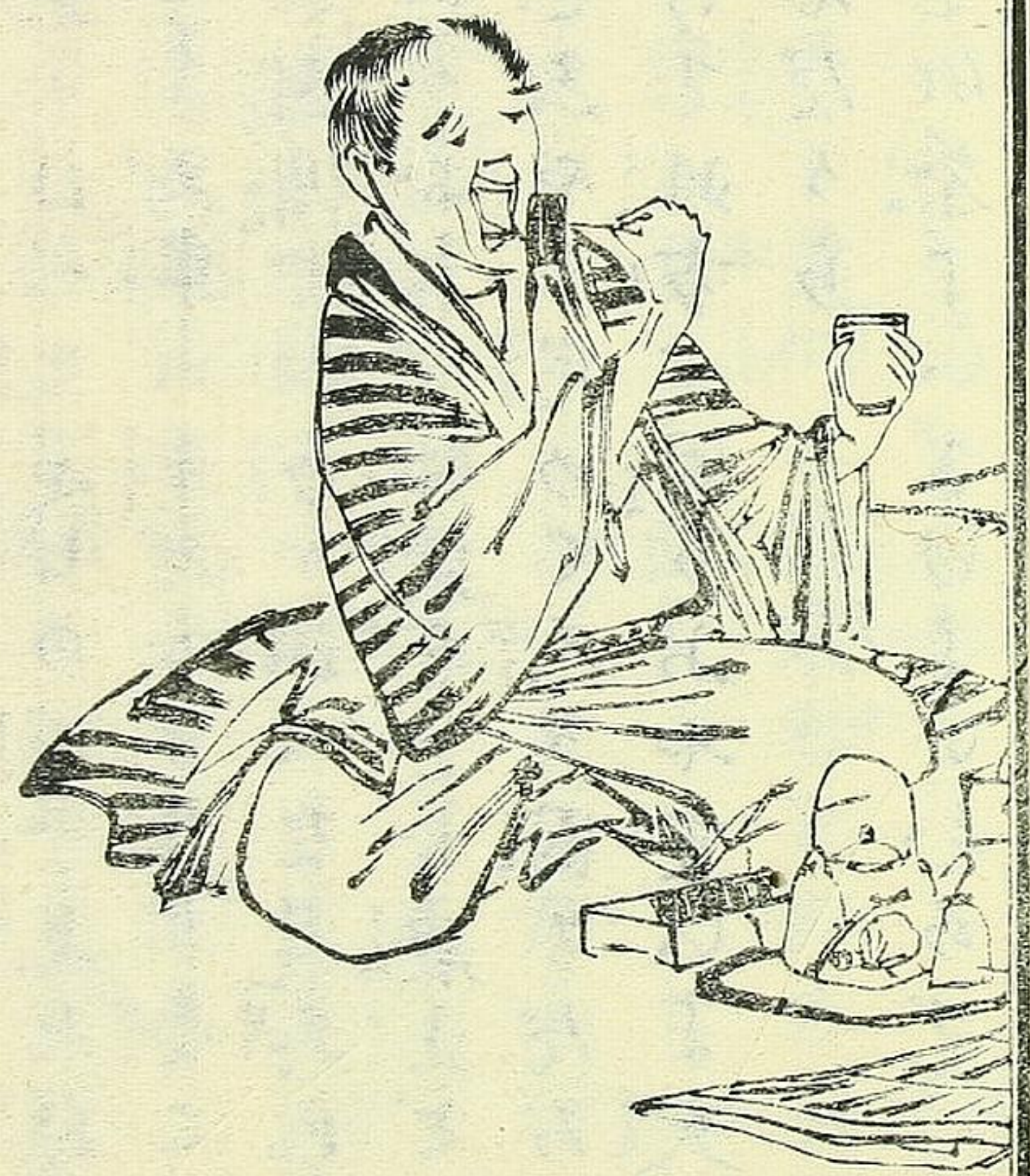
人<sup>と</sup>や六<sup>ろく</sup>人<sup>にん</sup>ふ播<sup>ま</sup>いと所<sup>ところ</sup>が種<sup>たね</sup>子<sup>こ</sup>々充<sup>ちゆう</sup>分<sup>ぶん</sup>だ... 時<sup>とき</sup>ふ弥<sup>や</sup>  
次<sup>つぎ</sup>さんお互<sup>たが</sup>つに斯<sup>う</sup>やつて居<sup>ゐ</sup>ちや退<sup>たい</sup>屈<sup>くつ</sup>で面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>も  
わくわく再<sup>また</sup>徐<sup>じゆう</sup>々<sup>く</sup>世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>ふ出<sup>で</sup>掛<sup>かけ</sup>様<sup>さま</sup>ぢやわつう  
出<sup>で</sup>掛<sup>かけ</sup>なくつて如<sup>ごと</sup>何<sup>なに</sup>もるものう此<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>な立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>ふ智<sup>ち</sup>惠<sup>ゑ</sup>  
囊<sup>ふくろ</sup>と此<sup>こ</sup>中<sup>なか</sup>んすを捨<sup>す</sup>て置<sup>お</sup>ちや勿<sup>な</sup>体<sup>てい</sup>へ福<sup>ふく</sup>くや今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>  
出<sup>で</sup>掛<sup>かけ</sup>た日<sup>ひ</sup>もや斯<sup>う</sup>うよ  
谷<sup>たに</sup>の間<sup>ま</sup>ふわくれー鼻<sup>はな</sup>をこのたむら  
ふじらもたうくひきのばさあん  
何<sup>なに</sup>も角<sup>かく</sup>え聞<sup>き</sup>てはめたる智<sup>ち</sup>惠<sup>ゑ</sup>ふく修<sup>しゆ</sup>  
たうむせうもひふ泥<sup>どろ</sup>わたらん

ア愉快<sup>ういかい</sup>々々何<sup>なに</sup>も斯<sup>う</sup>う活<sup>かつ</sup>淡<sup>たん</sup>な精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>であくちや  
ア往<sup>い</sup>けわく時<sup>とき</sup>ふ弥<sup>や</sup>次<sup>じ</sup>さんいまア最<sup>さい</sup>う明<sup>めい</sup>治<sup>ぢ</sup>も二<sup>ふた</sup>  
十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>経<sup>た</sup>つて衆<sup>しゆう</sup>人<sup>にん</sup>が開<sup>ひら</sup>けたうら一<sup>いち</sup>も二<sup>ふた</sup>もソレ改<sup>か</sup>  
良<sup>りやう</sup>ヤレ改<sup>か</sup>良<sup>りやう</sup>と日<sup>ひ</sup>々<sup>々</sup>變<sup>か</sup>て注<sup>しゆ</sup>くわく此<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>も幾<sup>いく</sup>分<sup>ぶん</sup>う  
面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>へやねへ速<sup>すみ</sup>達<sup>たつ</sup>げへわく素<sup>す</sup>ソコテ最<sup>さい</sup>うお  
直<sup>ちやく</sup>ぐ膝<sup>ひざ</sup>栗<sup>り</sup>毛<sup>もう</sup>も微<sup>み</sup>が生<sup>せい</sup>へて外<sup>が</sup>少<sup>せう</sup>が悪<sup>あく</sup>いうら此<sup>こ</sup>奴<sup>やつ</sup>  
アお廢<sup>はい</sup>止<sup>し</sup>とやつて馬<sup>ば</sup>車<sup>しゃ</sup>と改<sup>か</sup>良<sup>りやう</sup>ーやうぢやねへ  
ウ<sup>う</sup>素<sup>す</sup>をいつアまご早<sup>はや</sup>へや此<sup>こ</sup>家<sup>か</sup>ふや人<sup>ひと</sup>力<sup>ちから</sup>でも感<sup>かん</sup>  
心<sup>しん</sup>しねへ矢<sup>や</sup>張<sup>ちやう</sup>りチヨイおむらいつて間<sup>ま</sup>々<sup>々</sup>  
ふ素<sup>す</sup>合<sup>が</sup>とせらアね素<sup>す</sup>盟<sup>めい</sup>兄<sup>けい</sup>い何<sup>なに</sup>も卑<sup>ひ</sup>屈<sup>くつ</sup>ふ人<sup>ひと</sup>間<sup>ま</sup>ド

月夜... 不...



ふー  
やま  
ゆめ  
なほ  
こころ





や今度おいふが出掛る日ふや世の直だもの  
ならば二頭立の馬車と買て置くべしだふ孫次マ  
アこそいつア止しねへ又過日の階子見た様で  
困らねへハハハハニ馬車の車だらうら替り番こふ  
引くね阿兄さぞ因循で仕方が涙へな忍其れを  
ア何様でも宜いがおるが膝栗毛とお廢止と  
たら堂辨の何と志やう定めて人が困るだらう  
人々が困つたりて此方が困らふや宜いよ夫が  
當世の流行もんだらうら  
まゝと色ひと色よしの茶よいさけよいおめぞ

うさねもそまばゆる福をもする  
發笑もせやがらアハハハ何せ膝栗毛と止めるこ  
つたうら刷毛の序ふ名迄も改良しやうぢやね  
つハ發範の序ふやらふよまおいふア最う好い  
名と極めてるよ發若けへだけ早へいそして何  
といふ名をま左様さ丈鼻といふ名ぞ發ア丈鼻  
こいつア可笑い漢の玄徳の後弟見た様ぞハハハ  
何が何だろおるあも些とも解らねくま貴兄學  
文が足りねくうら解るめつよこいつアおいふ  
の此鼻が壹丈も高く成訳ぞかね然るると何様



夫大力でも鼻でピンと突刺さるに其上高けへ  
 だけ能う利うら蠅でも蚊でも嗅はけるから甘  
 へ目ふらふをねへ發だつて長過て邪魔ふ成る  
 だろろうよ其ときア縮めらア發をれぢや腦の  
 下の子息とねんなじだねへうてつきり馬鹿の  
 廣告ど時ふお良の名も何様ーやうう其盟兄は  
 名も助的が宜いよ其助的のもんくい何のふ  
 こつたへ其兄の性も能遠つてるんだハーと  
 ○彌次へん小考へて何で適つてるんだよ何でと○  
彌次急ぎ立て煙管で其兄も性も助兵衛どうも好い  
たみとパタタ

ぢやアねつう彌次ナンダ人と馬鹿ふまる此餓鬼  
 奴をさぢや汚奴屎ぶくる次第小志やがれ  
 お良アお良で勝手小老らアと○珠の分をばらばらと見え  
禿天窓小湯気が透りて柵の柵をけとズタズタと流し  
小成てゆる其多ハ何うか見てはまりのわうーさよ  
 其子代と種し帳株がききものでながぎせる  
 や小志ふはくふお良らざり々わ  
 弥次「ナアニ此餓鬼棒めーと○おたるきせるふて頼  
たをヒツシヤリお  
 其ア痛いよ此馬鹿野郎と○おつて  
此物お小ぢるゆへ隣で徳栗毛と見て居る隠居隠居カラうしこ  
免んなせましオコレ



孫次喜多  
官華鼓  
初編二  
裁正



喜多  
裁正



私わたくし一ひとや柴井しばいの隠居いんきょではねお隣となりふ居ゐるものでござりやせぐ聞きけバ何なにう強きん々くの音ねが致いたしやせ  
 お静しずかふ願ねがひやせ孫次此この畜生ちくせいヤイ○バタンー痛いた  
 へ奴やつ○リいにいヤ隠居マアコレー左さ様やうもるもんぢ  
 やござりやせんと○三寸さんすんの舌した乃なちうらで五尺ごしゃくのる  
 隠居いんきょ三寸さんすんの舌した乃なちうらで五尺ごしゃくのる  
 ちうらで五尺ごしゃくのる  
 ちうらで五尺ごしゃくのる

お隣となりのご隠居いんきょさんでござりやせう誠まことふハア面めん  
 目めもござりやせん隠居何なに以もたしやして何方どこでも  
 此この様やうふこたア有勝ありがちなもので何時いつも能いい天てん氣きを  
 かりはぶくもんぢやけりやせんうう然さしてマ  
 ア一いつ体ていの如何いか以も事ことでござりやしたろと○  
 今いまでは改名かいめいも出来できやせん孫次ナア二直ふたぢふ出で  
 来きやせ隠居でも許ゆるを所ところで許ゆるしやせんうう然さ  
 してお名なも何なんとお見立みだてでござりやせ孫次ハイ此この  
 男おとこの丈鼻ぢやうびし私もわたし質たちが助兵衛すけべゑだうら助すけ的てきで宜よろうら

お隣となりのご隠居いんきょさんでござりやせう誠まことふハア面めん  
 目めもござりやせん隠居何なに以もたしやして何方どこでも  
 此この様やうふこたア有勝ありがちなもので何時いつも能いい天てん氣きを  
 かりはぶくもんぢやけりやせんうう然さしてマ  
 ア一いつ体ていの如何いか以も事ことでござりやしたろと○  
 今いまでは改名かいめいも出来できやせん孫次ナア二直ふたぢふ出で  
 来きやせ隠居でも許ゆるを所ところで許ゆるしやせんうう然さ  
 してお名なも何なんとお見立みだてでござりやせ孫次ハイ此この  
 男おとこの丈鼻ぢやうびし私もわたし質たちが助兵衛すけべゑだうら助すけ的てきで宜よろうら



ふと言ひやせ隠居成程面白へお名ぢや然し貴所貴所  
 方のお名も今でいモウ異國迄も知れ切てるか  
 ら宜いぢやつりやせんう素でらうら改良し無  
 くちや腐敗うつて甘くつりやせん且い隠居夫  
 れぢや私の隣の山邊どんふも聞てごらふじ孫次  
 「イヤサ聞いでも私が直出来しやとと○互張言  
坐もあらけしし話も途途へて素素ご隠居さんは何か  
ク多多ハ何くしきりふ程へて素素ご隠居さんは何か  
 ら何まぐお博む様でござりやとぐハ疊敷乃狸  
 の翠丸の上ふお坐りなとつと事がござりやと  
 う隠居イヤナアニ以まごふ其様なものと見まし

た事もごさせやせんが貴所の素素ハ一私も  
 まご見やせん隠居ハ一素貴公も此位を大き素素  
 とお喰成さつたことがごさせやとう○兩神の和次  
と丸のぞー大き隠居ヤレと大きお蘇ぢや私しや若  
を柳さつつる隠居ヤレと大きお蘇ぢや私しや若  
 へ時うら蘇が大好でごさせやすが然し以中ご  
 小其様な品々見と事もござりやせん一体へ何  
 處おござせやした伊ヤナニ何處もござり  
 やせん私だつてまご見た事も聞と事もおござり  
 や皆ん隠居ハ一ドレお暇致しやせふマア左様を  
 ら伊ハ一左様照らコレハ雅有りござりやした



喜多コレハ世間の人尤何も知らねへもんだ目い  
孫次時小喜多公改良の書付と出さうぢやねへり  
オツト合点々々そこふあつちやア喜多八様  
だドレ認やせう時小宛い何方だるう發「ハ、ン何  
方小仕様りねく「アハ」解つたコレハ今回打  
はじめたア編者所の尻嘗ぢや目い「マア何せぎ  
と見る屋」だ

改名の願

阿西亞洲大日本帝国三千七百万  
人外住所不定千万人手掌寄留新

才民

笑種子賣兼睡覺職

改名助的

枳面屋称次郎兵衛

見掛四十六年  
正五十七年位

同居同職新才民

改名丈鼻

尻切觀音地尻喜多八

見掛三十八年  
正四十八年位

私共儀文化三年甲戌三月十日返舎一九の手小  
生れオギアの声と一緒小我等の氏名と千万  
人に喚立ちき今日迄内國ハ勿論海外迄も奔







思つゝり好い名がはきやした何もハヤ結  
構だを發何で結構かへ夢何で結構かへもねへ  
もんだ實不好い名ぢやねへう開化の名物ホン  
ニんたもんど然して化を花と通して是ら花  
が一杯咲ねね發左様々ママア第一短く成  
て能いねへ

彌次彌次の志り此處をとはあしてこまうらひ  
身がる記まふ天のぼり勢舞  
夢よほこびと八つのおぢおかぎらずと

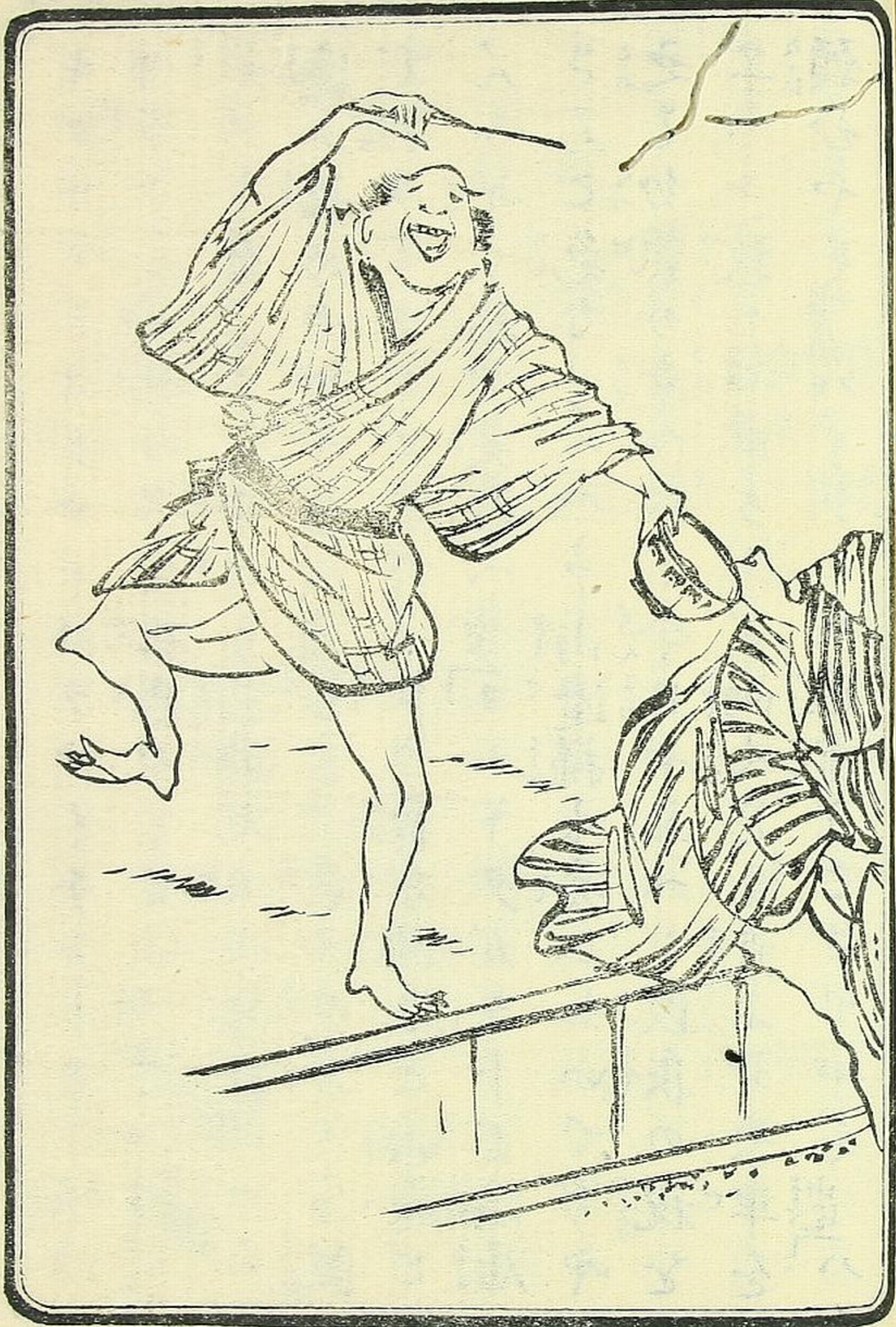
以くらでも来ひうけてやるから  
延喜延喜だく發面白へく夢オイ彌次さん今夜  
こお祝ひふ一杯やせりねそれふしそも  
能い塩梅へぢや今日の芝浦の無塩が自分で此  
追つがつて来るさうだから發ナア二貴兄馬鹿  
な事を言ふ人間ぢや夢だつて今日を魚がたい  
ぢやつて衆人が言ふぢやねへう發オヨシ成  
程近へこたア近へや今に席公が廻つて来たら  
おら甘くきつて見せらアマア黙まつて居ね  
へ懸へエー今日は生海鼠小蛸に鯛尔鮎で悉皆



生ておやを發オそれア好いものむつうをハ  
 おひつア豪氣だハ何でも能いよハと○  
 本一は突ふゆへ席「お前様何ですわくハこれ  
 妙どハ貴兄一体何様為たんごこいつア  
 だハ發ハ今日を笑つてもハ二足と三足  
 の魚は呉れると公衆が言ふうらさコレ席公壹  
 足でも好いやねハ席旦那串戲云つちやア  
 往せぬサア何う上げやせう海鼠をまど桶の  
 中ピンに駈廻ておやを蛸も船ちやいつても  
 ジワに吸付やすイへ正實でも發改良始のお祝

だうら些と餘計小買つて何げやせうねハ喜多  
 公左様サお客も二三人見得てるしニヤンと  
 二三足の駈込やせうよ發オツトヨシハ席公コ  
 う鯛の吸物と甘煮と蛸の刺身ふりとも海鼠と  
 蛸の三杯酢ナント何様だ席へイハアコラサ  
 イコラサイハ海鼠のピンに蛸も吸付コラサイ  
 コラサイカンと○  
 發「ハアピンにジウに合せて今晚やるんだツ  
 コイドツコイハオイハ喜多公大きお鉢ぢや  
 ア鉢ぢやアパチーと○  
 手と毎此喜多ヨシキタヨシ





孫次郎  
 狂言  
 大目  
 狂言  
 大目



目録



目録

キタサアーコラサイコラサイチンーと  
席サアー出来やーた出来やしと  
サアー弥次さん今日も三時だ日短けへうら  
速ふ始めやせうねー發お良ア最う先きうら  
で胸ダビツシヨリだアコウ貴方隠居と山邊ど  
んと早く招で来ねへきヨシキタガラーご隠居  
さんご免なせへハア山邊様も爰ふおいでぢや  
之も勿氣の幸ひハー今日やエヘン改良の祝と  
エー致しやまうらご兩人とも直ふお来車を  
願むやま隠居ハイソレハ難有うござやま

ハアソレハ何も降て来た僥倖難有うぞざいま  
先きしてご改名が清まーたりへイイマア左  
様をら何卒直ふ願むやまモウ家の阿兄が先き  
うら涎と流して待て居やすお直ふ々々ガラ  
隠居只今直ふサテモ急忙いお使ごハードレ山  
邊先生往やせう邊ハイ涎が澤山點ちて水ホク  
成ちや甘くとりません速く行せうガラーご  
免おせくまし發ハアご隠居様山邊先生コレハ  
サアー此坐へ何卒隠居コレハ今日ハ何也難有  
う邊今日私迄もお招待ふ任せて参上ました

開此爾大書多の編二







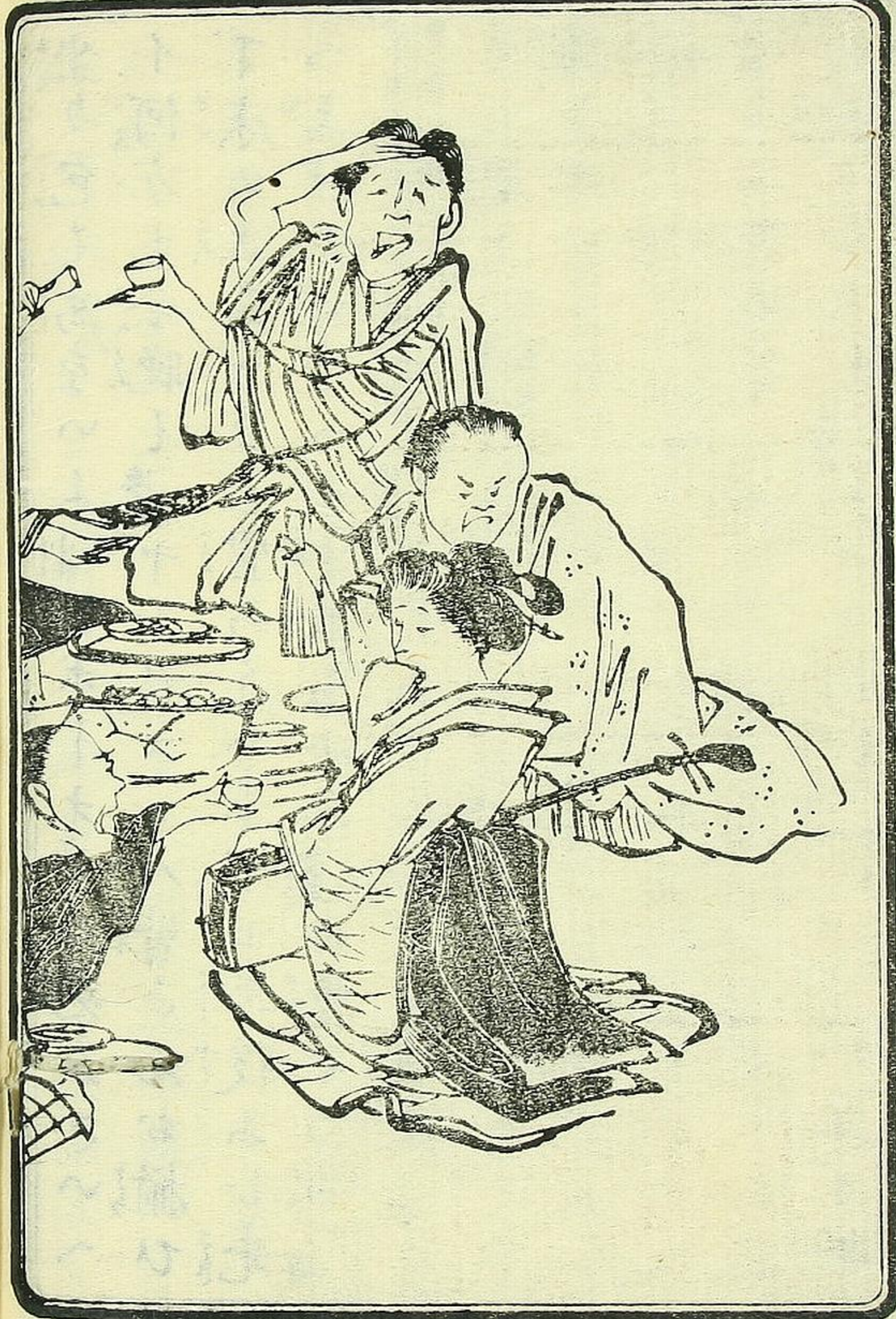
トツトとラツ走つて行きやせう發オイハ喜多  
 公貴方毛布でも床の前ふ布以てお呉れ喜其様  
 奈品を家も無へよ弥次チヤア何でも宜以よア  
 風呂敷でも宜以目以き一体其以つう何様也る  
 んだエへ弥次エへ氣の利きねへ人間だ茲此コン  
 床の前ふ斯ふ布んだよ今に姉達が来て坐るか  
 らと○ちげ以てのるうオヤ姉さん此家でも  
 うホー箱ガラーへイご免なさいし發サア  
 此席へコレハ何もご苦勞さま何草此布物へと  
○弥次可哭山道サア左様氣と煩さふいで談上ふお

坐り包も為ないよ小花オホーオヤご免なさいへ  
 イ何方も今晚も隱居ヤレコレハ皆さんお揃ひ  
 で床の上あらまご宜ろうハドレ年後ふお先さ  
 へ上げやせうへイ小若ちゃんご免と○山道ハ  
すそれらおみね小花ちゃんと頂戴ハ  
 小花ちゃんと頂戴ハ  
 イご免と○弥次おくれならば  
 頂戴やせうと○手とおおみ孫さん一つ  
立て行く外もおま多ふ喜ア今夜も如何もおめつ  
立て行く外もおま多ふ喜ア今夜も如何もおめつ  
 まいい晩だと○後とまて登つて目むう山道サアおみ  
 ね何うひとりらハイと○三人でひきチトン梅が軒





強次喜の  
改名の祝  
宴とある



開化強次喜の初編上



端たふおほむと里さと花はなに逢あ淑せをまらとりの何なにけて  
 うきーきけそらぶみひらくもらねのはづかー  
 くまごどけかぬるうすごほり道小町こまちどこふ  
 かふひーもころむひと夜よで棧せきがねがひうなふ  
 と何なにまびこの大おほ看みア思おもへばもかなき魚いふーぢ  
 やナア隠名弥次「ア親おや玉たまアき甘あまいどあまの尻おし尾びと  
○英多 意でその 僵頭と一包投げきア、面白おもしろくもねへ  
○お！ ても見むきまーないゆへサ皆みなさんお何なにがりな  
と○グツー言いつて勝かち手てみ行いきサ皆みなさんお何なにがりな  
せと○いらくふ能よがるこれの道何なにう些ちと愉たの快しみなや  
つうねへいーと○これうらやむれ都みやこがと大おほ層かさね

ドニーご免まなせんガラー道モウお迎むかひナント  
 速すみへもんだねへ簾イヤ最もう更かえーたせ○これ  
いまの仕舞うけるサア小こ花はなちやん小こ若わちやんモ  
 ウおむらき小こ致ちしきせうね○弥次送感げふ三さんへ  
 イ左ひだり様さまちらと○席を立つゆへ弥や次じコレ小こ花はなさん  
 マア待まちなせへよ次貴き女に先ま刻ときの話はなしも道アホーと○  
庭ふありるゆへ弥や次じたまり簾ア、痛いたへよコレ何なにを  
うね小いふさんと手をひく成なるんで道過あ刺しの板いたの間ま小こ振ふ慄おそてるの火小こ火ひ  
鉢せくよこーやがらぶ道小こ串くし戲あそ能い加か減げんふ為なや  
がれ籠棒めへサアー小こ花はなさんサツサとお出いな

月七六日 喜多初終上



さいよ弥次箱屋さん一寸とお待合せつとお坐敷敷  
き水呑ふついで来箱屋イイヤモウ頂きやせん弥次イヤサ  
てもこ左様以もあいぞとシ無理ふしむ大結ゆへたまこや箱屋  
「こいつア酒ぢやねへヤ畜生人と遊戯道具小為  
やがつて只の水をうまご能以がコレア杯洗の  
水ぢやアア、ペツ〜と〇並て厭る怒り口急き  
籠鼻のみも物のふほむふゆにぬれど  
そと目ふさく見ぬぞくや一き  
隠居遊サテモ「甘くきつたハ〜ドレ此方共も最  
らお暇サア山邊さんと〇いとまごひらッとで弥次サ

テモ喜多野郎の居ないが如何為たるハア解  
つた那奴先小廻つて小花と何様が為やがる日  
以こいつア面白ハマテはおんが駈て往て肝魂  
を打潰しておいて此鼻が甘く遣つて見せやう  
と〇後近く往て往オイモシ小花さん一寸と  
待て呉んをせへ家の喜多が居やせんが貴女わ  
お知り成さるめへう小花「イ、へ其様おん存  
トませぬよ貴女が知らねハ答アわハヤコレ  
と〇知れと非小花「コレマア貴方は何を成さるんで  
まうコレお止しならなア箱屋さん彌次此爺



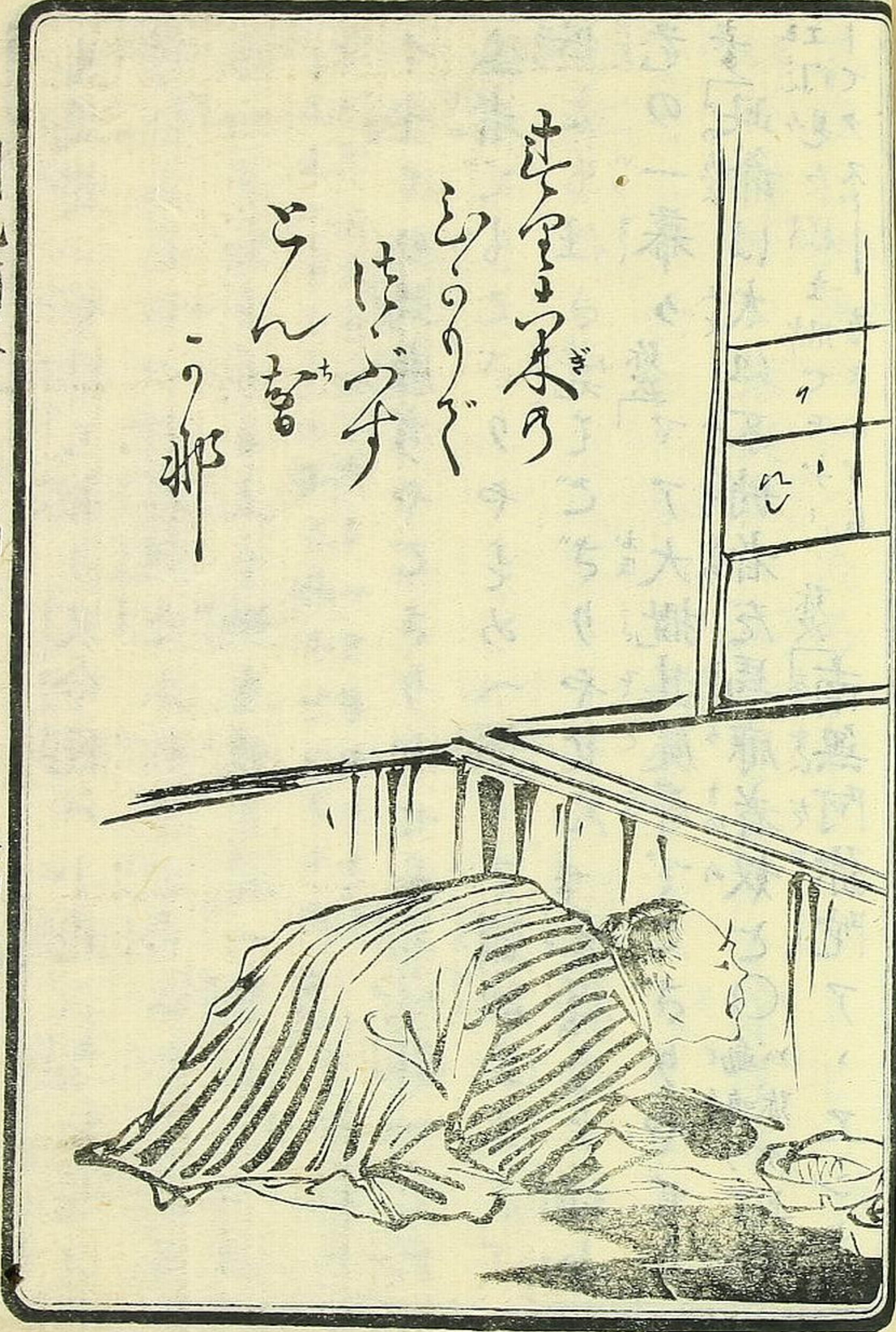
開く彌次喜多初終止

ぬは何と為る年甲斐へも無へ戯気めど汚奴  
盗賊でも為る子簡だるう三アー大寝だ追剥  
が来たアと○彌次根絶へアニ其様を惡い  
もんぢやねへや途方も無へお良ア此阿魔小約  
束が為て在つて来たんだ其様をら能いやと○  
帰る此間ふま多の寒さの寒し五体の痛目とハテナ  
野郎奴が小もふ惚やがつて先きうら長涎流  
やがつてけつがゆたが後うら尾いて往たと見  
得るこいつア面白へおいゑんが一番畢元と打縮  
めてやるうかと○羅刹朝ほど洋服店うら持て洋服を

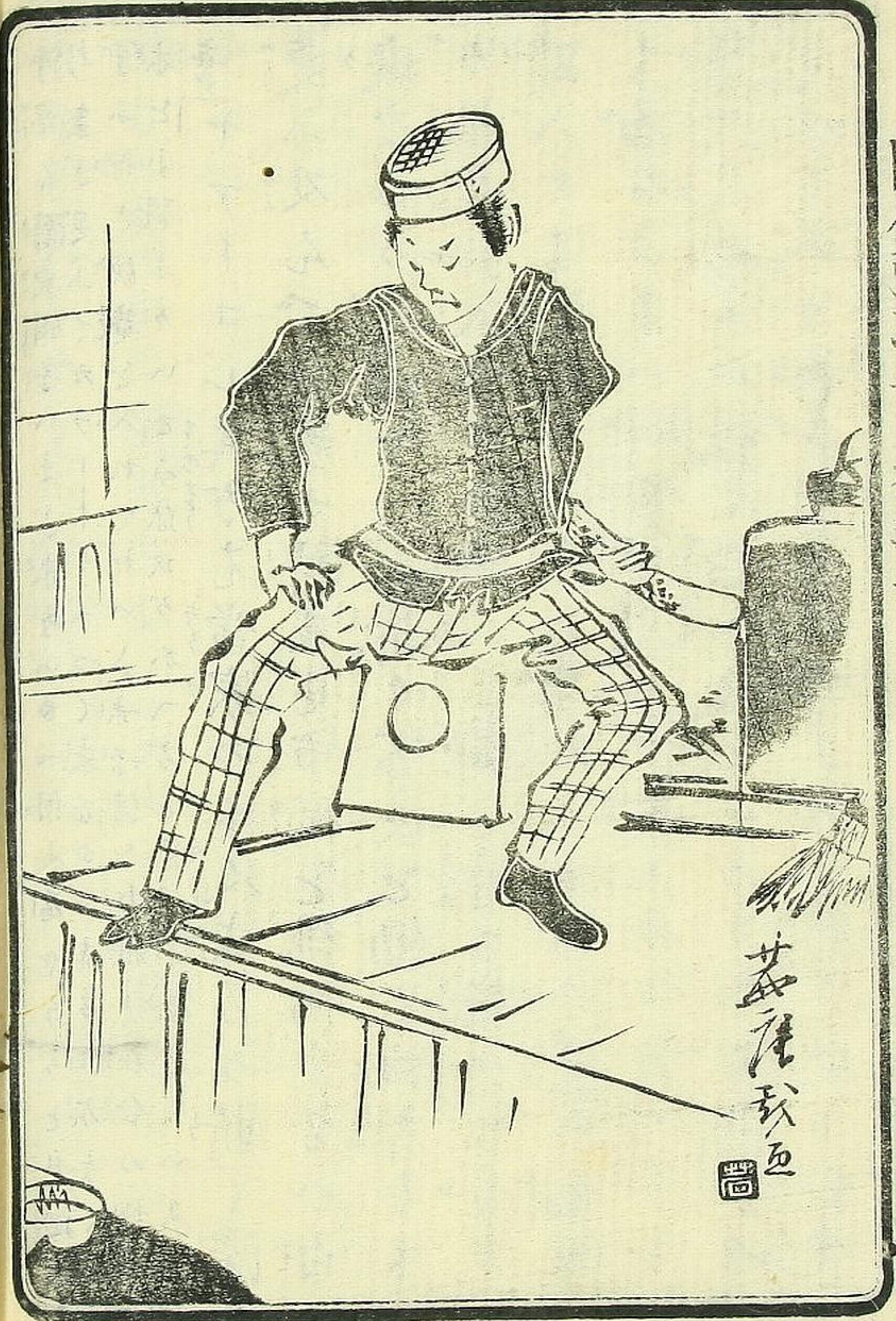
更ふ及んで提燈も持たむ市街と徘徊するの白  
癡なるう痴癡なるか抑々不良と働く曲者なる  
う拙者彌次喜多の兩人小對し尋る廣之れ有り  
踏入りし處門口の戸は開放ながら一疋の猫だ  
も居らざるの何事ぞ彌次ハア恐入や一た喜多コレ  
彌次其様ふ口軽く恐入たとむりぢや清茶以  
其方も平日喜多と不丁寧小致し己を獨り飲食

日七彌次喜多初終止





是るまゝの  
 心づゝ  
 けり  
 けり  
 けり



其  
 其  
 其  
 其  
 其



も為好い布團も被り又今晚い小花小思と懸け  
 手込ふまゐるの所存此方ふ於て明白不知り居る  
 己いサ斯う成る上も蠅も蚊も遂一申立○彌次  
 といふるへあがら土間ふ両手とつきもの 彌次「イヤ私  
 や全くの馬鹿ぢやござりやせん又瘋癲へと云  
 ふ者でもござりやとめへ然して盗賊あんざア  
 些とも仕と覺もござりやせん 其様なぞ彌小  
 老の一幕う發「マア大概其處等でござりやせろ  
 此爺は太以不埒者だ馬鹿者奴と○動鳴つたれ  
 工門見た様を肌でモザい 彌次「南無阿彌陀ア、エニ  
 一てクス」なきながら

喜多は何所へ行つたらうア、エニと○聲もあ  
 ちく 喜多「コレ彌次爺い其方も喜多と餘程尋る様  
 子なるが喜多が居れば何する工へ夫さぢや此  
 方様ふ向て三度天窓と下げろ 彌次「恐れ入りやと  
 難有うござりやすと○土間ふ手とつき三度いさて  
 喜多「コウ其方の尋る喜多もコレ茲ふと○言ひつゝ  
 脱れを弥次夢現のおもひひみて顔とつけて見 彌次「奴  
 るとこそそもいうよ喜多にて有りたれむ見 彌次「奴  
 野郎まゝおゑと馬鹿ふ為やがつたあと○火の如  
 坐敷ふら服まで沢菴の糠かぬり来る喜多が姿と見れ天  
 窓のつらつらとやうさやうさ風を吹かぬり可矣 喜多「ナ  
 雪のつらつらとやうさやうさ風を吹かぬり可矣 喜多「ナ  
 一さよいかりも失せておぼれぬり可矣 喜多「ナ



ト弥次さん妙だつたねへ感心だろり弥次途方も  
ねへ馬鹿な目小逢せやがつた面白く飲だ酒も  
最う醒つ仕舞たドレ又微し温けて飲ろりくと  
○呑鯨一ホ 弥次今夜の藝者も三人ともおらふは  
の字で何とえとやハハハ好い顔で笑つてむうつ  
おと居さアねへ喜へハ馬鹿々々しいふも程が  
何らア發だつて妙お好い目でおらと見て何も  
志やうねねへ様子だつとよ喜ソレア其苦だア  
貴兄の鼻ふや墨が一満塗付てそして脊中ふや  
ア菊の花と紙グどつさで結付て有るものだま

だつて笑ふ筈サ 弥次ハハハ左様う矢張り構ひたが  
つてねへハハドレ那奴の寫真でも抱て寝やせ  
うと○弥次は昨夜多は夫一て居たり一が早ね  
起り喜オイ弥次さん最う起ねへ發アハ前夜々  
好い夢と見て何も宜うつた何でえいさし正實  
ふおらふ惚れこんだとい喜ハハハ又熱が發や  
一たおコウ弥次さん之うらモウおらつちも開  
化弥次喜多となつちやア今ア些と活潑な風ふ  
成つてお互へふ小意氣ふ遣りけなくちやア  
往け無へ然して今アモウ餘程氣持と張込で何



様な剛力でも撲り倒して遣る精神が第一だ左様懦弱て居ちや實に困らア左様々々意氣ふ為うけて行くをけれア打伏してゞも遣る氣が全くちやア出来ねへな幸然して一でも二でえ改良々々グロ僻み成て出来ねへ事でえ何のそのと白粉の一石も塗付てお扮粧と為る乃が屈竟だよソコデおられたちが散髪も些と短く刈ひで時々水油でも付て香水でもパツパとやらなけれア田舎漢見た様で意氣地おしお見られるから甘くねへを 弥次「ハア成程をいつア申てきだ

ア左様為れア那奴がお前さんの内儀さんみ成てお呉んをよと来らアエへんそして近所の後家なんざア彼方うらお頼だハ 左様戲氣て居ちや往けねへ能くおらのご説を聞ねへナ夫うら言葉が爽なくちや不甘よ併し今の言葉も七日の粥とねんおじこととで混交をうら些とや少とい失言た處が昔の堂上方に詞見た様よ六ヶ敷ねへうら為易いやねへ一体へ今の言葉は日本の昔詞乃賣れ残り支那のチンピンカニ詞の小賣と赤髮詞の卸賣と攪き合せて斯う



云ふ風ふやるんだこのぶろもつかふほころび  
そめーふりみぐさと昨夜偶然ノ僥倖デ「ハ」ヒ  
ヤヒと斯ういふ工合ふ以て注けア正直で意氣  
て伶俐で浅くても博へ様だら好いよ 其様  
なこたアおらだつて百も二百え承知と言ひ度  
へガナデモ二つと三のも知り切つて居らア  
ねへ 夫ら何處りへ移轉て何り宜い商賣へ  
と創めなくちやお互へふ身体が吹貫ふ成つち  
や仕方有るめへねへ 左様々々一緒ふ蒸氣  
一杯も儲けて每晚寢酒の一斗も呑む様ふねへ

さう往きア那奴が家の内室さんナント甘へも  
んぢや 貴公へ何も慾の深へ男だおらア紙幣  
ふら高瀬船一艘で宜いよソデ其様を了簡てモ  
ウおらが胸中ふはチヤント決いて居やまが又  
後日の話ふ致しやせり  
篇者曰こそ板ねこしで打塩梅や汁加減え  
不甘様なきどお更おら漸次可愛味が出ま  
す  
又曰これ々三本と一把と一月ふ一本宛室  
ふを繰出仕組あ依て其揃つた處で自



然活花の躰裁ふ成り句むと加て来やす

開化弥次喜多初編上終

明治二十年一月三日版權免許  
同年同月三日出版

定價五十二錢

鹿兒島縣士族

著者兼出板

伊地知耕作

東京麻布區麻布鐘崎町  
五十四番地



賣

東京神根路町丁目壹番地

巖

々

堂

捌

同兩國天倉町八番地

佐脇金次郎

010190525258



